

《実践報告》

新型コロナウイルス感染症流行下で、 保育者はどのように子どもや家庭への支援を行ったか

石井 正子（現代教育研究所所員 初等教育学科）

木村 英美（現代教育研究所所員 初等教育学科）

横山 愛 （現代教育研究所研究員 あい・あい保育園）

問題と目的

新型コロナウイルス感染症（以下、COVID-19と表記）の流行により、日本のほとんどの教育機関は、2020年3月からおよそ3か月間にわたって休校措置をとった。ただし、幼稚園、保育所、こども園については、当初の「一斉休校要請」の対象になっていなかったことから、管轄する自治体、部署によって対応はさまざまであった。4月7日に緊急事態宣言が出されてからは、足並みをそろえて、原則として「休園」、または「登園自粛要請」を行っていたが、その間も医療従事者等のいわゆるエッセンシャルワーカー並びに、支援の必要性が高い家庭については保育の利用を認めていた。

東京大学保育実践政策学センターの遠藤らを中心とするグループは、いち早く「新型コロナウイルス感染症流行に伴う乳幼児の成育環境の変化に関する緊急調査」（東京大学大学院教育学研究科附属発達保育実践政策学センター，2020a）並びに、「保育・幼児教育施設における新型コロナウイルス感染症に関わる対応や影響に関する調査」（東京大学大学院教育学研究科附属発達保育実践政策学センター，2020b）を実施した。以下は遠藤らの調査結果を基にした知見である。

緊急事態宣言の下、ほとんどの保育施設が休園または登園自粛等の措置を取っていた時期に実施されたこの調査の結果によれば、母親の47.1%、父親の29.3%が1日の育児時間が平均して「5時間以上増えた」と回答していた。この期間に子どもへの接し方や育児方法が「変わった」と回答した保護者は69.4%に上り、変化の大きな理由としては外出自粛要請（86%）、次に休園・休校や登園自粛（77%）があげられている。また、半数以上の回答者（56.8%）が精神的健康状態が良好でない状態にあり、特に先の設問にCOVID-19流行以前に比べて子どもへの接し方や育児方法が「かなり変わった」と回答した保護者の精神的健康度への影響が大きいという結果であった。突然、これまでの生活パターンが一変し、在宅勤務と在宅育児の両立を迫られた保護者の戸惑いとストレスは非常に大きいものであったと推測される。

一方で、保育施設の側は、保護者に対して事務連絡以外に、61.2%がCOVID-19に関する情報提供を行い、52.5%が在宅での子どもの過ごし方に関する情報提供を行っている。また、登園していない家庭への対応として、65.5%が電話で、59.8%がICTツールを活用して、連絡を取っていた。さらに、登園していない家庭のうち特別な配慮を要する園児の家庭や、高い育児ストレス、子どもへの不適切なかかわりなどが心配される家庭については73.6%が「把握している」または「しっかり把握している」と回答し、定期的な連絡を入れる以外に、必要時、緊急時における子どもの園での特別受け入れを実施していた。毎日顔を合わせて様子を見、様々な支援を行ってきた子どもや保護者が不慣れな在

新型コロナウイルス感染症流行下で、保育者はどのように子どもや家庭への支援を行ったか

宅生活の中で抱える不安や危機を心配し、少しでも力になろうとしていたのである。

本稿では、実際の保育現場で行われていた、保育施設による子育て家庭への支援事例を報告し、COVID-19のパンデミックにより、突然これまでの育児方法の転換を迫られた家庭に対して、子育て支援の最前線を担う保育施設が行った支援について考察を行う。

実践報告1 東京都内 区立A幼稚園における取り組み例

1. 休校要請から緊急事態宣言終了までの保育施設の状況

2020年2月27日、安倍晋三首相は新型コロナウイルスの感染拡大を防ぐために、全国すべての小中高校と特別支援学校について、2020年3月2日から春休みに入るまで臨時休校するよう要請した。

この時期、幼稚園は、他の「学校」と足並みをそろえて休園としたところもあったが、緊急事態宣言はまだ発令されておらず、保護者の多くが通常勤務を行っていたため、「保育所」「こども園」を休園にすることは選択肢になく、それに合わせて、教育委員会が幼稚園は感染予防対策を十分に行いつつ春休みまでは通常保育を行うという選択をした場合もあった。

その後、4月7日に緊急事態宣言が出され、5月6日までの外出自粛が求められ、さらに緊急事態宣言が延長されたことにより、5月25日に全面解除されるまでは、ほとんどの保育施設も「休園」、または「登園自粛要請」を行った。

2. A幼稚園の保育実施状況と経過

A幼稚園は、木村が公立幼稚園に勤務していた当時から関与している幼稚園であり、以下の情報はA幼稚園管理職へのインタビューにより得られたものである。尚、本稿への掲載については、取材時に許可を得ている。幼稚園は、区の教育委員会の方針に従い、3月2日から春季休業開始まで臨時休園に入った。この間に予定されていた行事はほぼ全面的に中止になったが、修了式（卒園式）は、卒園児と保護者参加で実施することができた。

4月7日の始業式は、園庭にて10分間に限り、付き添いの保護者を2名までに制限して行われた。翌、4月8日の入園式も同様の制限の下で実施した。その後は、4月7日の緊急事態宣言発令にあわせ、東京都が都立学校を臨時休業とすることを発表したことを踏まえ、A幼稚園も5月31日まで、休園となる。

5月25日に、予定よりやや早く緊急事態宣言が解除され、幼稚園は6月1より、分散登園（学級の半分以下の幼児数とし、一日おきの登園）を開始する。

7月にはいって、午前保育（昼食はなし）で、全員登園となり、7月31日まで1学期の保育が行われた。2学期開始は、8月24日からで、猛暑の中での保育を余儀なくされたが、プール指導は中止になった。感染予防と熱中症の対策に最大限の配慮を行いながら、新しい生活様式における様々な制限によってストレスを抱えがちな子どもたちの活動意欲を満足させる保育を行うために、保育者は知恵を絞り、環境設定の工夫を行った。

3. 子育て支援

休園期間中も、延長保育（通常保育時間以降の預かり保育）は継続した。ただし、区から「両親の

就労等、保育の必要性がある子ども」とされた者や、やむを得ない事情がある場合のみ利用可能とし、できるだけ利用は控えてほしいと要請を行っていた。延長保育の定員は、通常20名（一時利用者を含む）だが、この期間の利用者は平均4～5人で、保育時間は、平日午前9時から午後4時30分までに限定した。

4. 園からの情報発信

1) 手紙による連絡

休園中、幼稚園から、各家庭には、文書により下記の内容を連絡した。

- ・ 毎日の検温と、健康確認カードへの体調記入の継続、登園が始まったら提出する
- ・ 生活リズム、うがい手洗いの生活習慣保持の促し
- ・ 不安や悩みを抱えたときはいつでも園に電話、ファックス、メール連絡をするようにと常に発信
- ・ 緊急な連絡の必要が生じたときは、緊急配信メールや幼稚園ホームページ、電話等による連絡を行う
- ・ 各家庭に3日ごとに電話をし、保護者・子どもとの通話により健康状態等の確認
- ・ 担任から子どもへの手紙を各家庭に発送
- ・ 休業期間中の園の絵本の貸し出しの実施（園への事前連絡をしてから）

2) ホームページ等の充実

保護者専用ページを新設して下記のような内容を提供した

- ・ 職員紹介
- ・ 先生たちによる製作、歌や体操のYou Tube動画配信を限定的に閲覧公開
（録画用のスマートフォンは区から各園に貸与された。）
例「おうちであそぼう：けん玉を作ってあそぼう」
- ・ 園の飼育動物の動画配信
- ・ 避難訓練の一環として緊急メール配信のためのメールアドレス登録
- ・ 「おてつだいカード」の配布
→どんなお手伝いができるか考えてみよう
（手伝いをしている場面の写真を張り、保護者からのメッセージを添えて登園再開予定日に提出する。）

3) 学級だよりを配信

- ・ 幼稚園が始まってから遊ぶことが出来る遊具の紹介
→写真付きで、ブロック、電車、ままごと遊具、ぬいぐるみや人形等
- ・ ハサミで遊んでみよう
→ハサミの使い方の約束
→切った紙でこんなことをして遊べるよ
- ・ クイズ
→クラス名にちなんだクイズを出し、次号で正解を知らせる

5. 職員の勤務

- ・休業中も管理職は出勤を原則とし、勤務日は必ず2人で勤務をした
- ・3密及び通勤途上の感染を避けるため必要最低限の職員が勤務する体制とした
(家族に高齢者や子どもを抱えている教員は優先して休暇が取れるように配慮を行った。)

公立幼稚園の場合、国、都、区などのさまざまな制度や規則に制約されながらも、今まで幼稚園で大切にされてきた人と人が触れ合うこと、寄り添うことなど、子どもの育ちや経験にとって大切なことを中心に考え、命を守るために必要な感染予防対策、教職員の勤務体制等についても十分に留意、配慮しながらいつでも保育の再開が出来るようにと願って準備を進めていた。そして、園と子どもや家庭との関係が良好に保たれるよう自分たちが出来ることは何か模索し、できることはやってみるという積極的な対応姿勢がうかがえる。

実践報告2 千葉県内私立保育園における取り組み例

1. 報告する施設について

あい・あい保育園 妙典五丁目園は、横山が施設長を務める認可保育所である。本稿への園名表記の上での実践報告掲載については、本社からの了解を得ている。

本園は、定員60名で、産休明けの0歳児から、就学前までの幼児を預かっている。2020年4月1日に新規開園したばかりであり、開園直前からCOVID-19の感染が急激に拡大し、子どもや、保護者との関係を築く間もなく、登園自粛を呼びかける事態となった。

当初、COVID-19は、子どもには感染しにくい、悪化しにくいと言われていたが、4月1日に0歳児の感染事例が確認され、また、4月7日には「緊急事態宣言」が発令されたことから、開園と同時に、登園自粛が呼びかけられ、可能な限り家庭保育を要請するという状況であった。さらに、5月4日の緊急事態宣言延長決定を受けて、5月7日より保育園の休園が決まった。休園中は、家庭保育がどうしても難しい子ども2名のみの保育を継続した。

本園では、保育園に入園が決定していながら、登園自粛や、休園措置で家庭保育を余儀なくされている子どもや、保護者とのつながりを作るために、様々な取り組みを行った。ここでは、その取り組みの一端を紹介する。

2. 家庭とのつながりを作るための取り組みを行った期間

2020年5月～6月 緊急事態宣言延長決定により休園
2020年6月以降 行政の指導による登園自粛要請

3. 家庭との絆を保つための取り組み

1) 動画配信アプリMEMORUの利用

MEMORUとは、保育園での成長の様子を動画や写真で記録したものを、家族の思い出として共有するツールとして自社開発したアプリである。スマートフォン・タブレット・PCから閲覧できる。

保護者は、会社の行帰りの電車の中や仕事の休憩中などに子どもの保育園での様子を見ることが出

来る。普段は、サンプルを無料で視聴し、気に入った動画や写真があれば購入できるシステムになっている。

今回のCOVID-19感染拡大による、休園や登園自粛の際、保育園との繋がり、保育士・栄養管理士等との繋がりが出来るよう、無料動画配信を実践した。

まず5月中（休園中）は、毎日保育士・栄養管理士による動画配信を行った。1日1回、動画配信をすることによって、保育園の様子を忘れないようにするとともに、担任の保育士や他のクラスの保育士の顔と名前を覚えてもらうという意図があった。

2・3歳児は、担任の先生が行っている動画が配信されると、何度も見返したり、「○○先生だー」とはしゃぐ様子が見られたと保護者から報告があった。

年長の幼児向けには、手作りの簡単に作れる形遊びパズルや竹とんぼ、ころころ迷路（ペットボトル）やマラカス・魚釣りやボタン付け遊び、スノードーム等の作り方と、遊び方の紹介も行った。

6月4日虫歯の日（歯磨きの体操）や、7月7日七夕の日（七夕会で行ったペープサート）の、園での行事も動画配信を行った。

毎日配信した遊び

5月	
7日	手遊び「あおむし」
8日	手遊び「ぐーちょきぱー」
12日	絵本「あんちゃんのよだれかけ」
13日	体操「ラーメン体操」
14日	手遊び「たこ焼き」
15日	絵本「にんじゃべんとう」
18日	ペープサート「しっぽ」
19日	手遊び「ミックスジュース」
20日	リズム遊戯「ぼよん行進曲」
21日	手遊び「ミックスジュース」
22日	手遊び 「おおきくなったらなにになる」
25日	ぬいぐるみと一緒に「バスごっこ」
26日	クイズ「なんの野菜」
27日	ペープサート「あわぶくぶく」
28日	ペープサート「ふうせん」
29日	手遊び「こぶた」
6月	
1日	手遊び「くだもの」
2日	歌「ぶんぶんぶん」
3日	手遊び「はじまるよ」
4日	ペープサート 「ひよこがこんなことになっちゃった」

2) 連絡ノートアプリの活用と電話連絡

連絡ノートアプリも自社開発の連絡ノートをスマートフォンのアプリで行える機能である。今までの連絡ノートでは、休みの日はやり取りが一切できなかったり、朝の忙しい時間に保護者が記入しなくてはいけなかったりした。字を書くのが苦手な保護者には負担となることもあったと思われる。スマートフォンで記入することが出来るので、移動時間やスマートフォンを触るのが習慣化されている現代の保護者にとって、使いやすいものとなっている。

休園に入ると連絡ノートアプリが活用されなくなってしまったので、せっかくの情報共有ツールを無駄にしないために、一斉メール（これも自社開発のシステムで、手紙を添付したり、お知らせを一括送信出来る）で、「家庭保育へのご協力へのお礼と、保育園と家庭での情報共有や保育で困ったり悩んだりしたこと、楽しかったこと、どんなことでも連絡ノートアプリを使用して下さい」と伝えたところ、多くの保護者が、日々子どもの様子や家庭で困ったこと、発達で心配なこと等様々な内容を送ってきた。

事例1 2歳児のトイレトレーニング

1日目

保護者「トイレ（トイレトレーニング）開始しました！」

保育士「お知らせありがとうございます。今後の様子聞かせてください」

4 日目

保護者「トイトレ 4 日目です。悪戦苦闘しています（笑）おトイレでおしっここの仕方がつかめない状態です」

保育士「一度トイレで『おしっこが出る感覚』がつかめると嬉しいですね。トイレトレーニングは時間がかかって大変ですよ。〇〇君のペースに合わせてゆっくり進めていきましょう！心配なことや分からないことがありましたら、ご相談ください。一緒に考えていきましょう。」

6 日目

保護者「トイトレ、土曜日から一日に一回トイレで成功できるようになりました。が、日に日にトイレに行くのを嫌がっています。気長に進めたいと思います。」

保育士「トイトレ、少しずつ出来るようになり嬉しくなりますね。〇〇君のペースに合わせてゆっくり進めていってあげてください。お母さんに褒めてもらったり、トイレにアンパンマンや好きなキャラクターや動物の絵を貼ってみたりすると、トイレに行くことが楽しくなると思いますので、ためしてみてください。」

8 日目

保護者「火曜日からトイレでおしっこが成功していません。トイレから出て数分後に漏らすことの連続です。タイミングは間違っとなさそうな気はするのですが、便器に座ってからおしっこをトイレでしたくなるような工夫とかありますかでしょうか。アドバイスいただけると助かります。トイレ内は、トイトレ前から飾り付けをしています、マンネリ化してきた感もあるので、何か工夫したいと思います。」

この連絡を受け、コロナの自粛中で外にも出られず、母親にも子どもにもストレスがかかっているのを感じ、すぐに電話で連絡をした。

初めから電話でトイレトレーニングの話をしていたのでは、なかなか細かい様子が分からなかったと思われるが、連絡ノートアプリで様子を想像しながら連絡を取ることが出来、また、電話での話の中で、1 歳児の時もトイレトレーニングを一度やったことがある話や、トイレから出てきてすぐにお漏らしされると「怒っちゃいけないと思いながらもイライラしてしまう」という話を聞くことが出来た。また、トイレトレーニングを辞めようかとも思うが、親の都合で始めたり辞めたりして良いかも悩むという内容もあった。もうすぐ休園も明ける時期だったこともあり、「保育園で他のお友達と一緒にゆっくり進めていけばいいと思うので、緊急事態宣言下で、家にいなくてはならず、ストレスの貯まる状況で、これ以上何かしなくてははいけないと考えるのはやめましょう」と伝えた。

11 日目（電話をした週末明けの日）

保護者「先日はトイトレについてお電話いただきありがとうございました。（オムツに戻したことで）子どもが最初は『アレ？パンツ履かないの？』って感じのリアクションでしたが、すっかりオムツ生活に戻りました。また、コップ飲みが出来なかったのですが、コップをつかんだようで出来るようになりました。」

保育士「お知らせありがとうございます。トイトレはゆっくりと進めていきましょう。コップ飲み

もできるようになったのですね。少しずつ出来ることが増えていきますね。これからが楽しみです。」

6月に登園してきたA児は、トイレトレーニングをする前に、まずは保育園で食事をとれるようにすることが課題だった。保護者からは、家では好きなものだけを食べさせている状態だと聞くことが出来た。トイレトレーニングはまだ先になりそうだが、今のA児の様子を伝えながら保護者にも理解してもらっている。この連絡ノートアプリがなかったら、保護者がトイレトレーニングに1ヶ月近く悩み、子どもにも保護者にとってもストレスがかかる1ヶ月になってしまったと思われる。気軽に連絡が取れ、育児の悩みにも相談できる窓口が用意できていてよかったと思った。

事例2 0歳児の離乳食開始

1日目

保護者「昨日から3回食になりました。メニューがマンネリ化してしまいそうなので、送付して頂いた保育園の献立を参考にしています。あんなに品数は出来ませんが…大人の食事も合わせると一日ご飯のことを考えている状態です。徐々にペースを掴んでこなしていきたいです。」

保育士「ご報告ありがとうございます。様々な食材が食べられるようになってくるので、お母さんは色々なものを作るのが大変だとは思いますが、楽しみでもありますね。また、お母さんたちと同じ献立でも小さく切ってあげたり、大人用だけ先に取り出したりして、Bちゃん分はもう少し火を通して柔らかくする等、でもいいと思います。あとは、お野菜なども市販のベビーフードのソース類で味付けを変えるだけでもいいと思います。おかゆも、マグカップなどにお粥用のお米と水を入れて同じ炊飯器で作ることもできるそうです。ずっと家で大変だと思いますし、あまり考えすぎず、Bちゃんと楽しく過ごしてください。」

2日目

保護者「2回目の離乳食を食べ終えた後に嘔吐してしまいました。3回食を始めたばかりで、食べる量が増えたうえに2回食のときよりも食べる間隔も短くなっているからかもしれません。熱もなく元気に遊んでいるので、様子見です。なんだか可哀想で食べさせすぎたかな、メニューが良くなかったかな、と反省です。」

保育士「嘔吐してしまうと心配ですよ。離乳食はいろいろな味を知ったり、食べる事に興味を持ってもらったりできると今後の食欲につながっていくと思いますので、楽しい雰囲気で行って下さいね。」

3日目

保護者「朝熱を測ると体温が36度台前半と低めです。最近特に低い気がします、低めの子もいるのでしょうか？耳で測る体温計なので、誤差もあるかと思いますが…来月検診を受けるので医師に相談してみようと思います。」

保育士「体温の件ですが、低い子もいます。高い子もいて、平熱が37.0～37.4度の子もいたりするため大丈夫だとは思いますが、一応心配であればお医者さんに聞いてみるのもいいと思います。その後、離乳食後の嘔吐は大丈夫ですか？3回食に変わり、硬さなども変わり胃がビクビクして上手く消化できず、嘔吐や便が緩くなってしまうこともあります。もし、続くようであれば、検診の際に一度

新型コロナウイルス感染症流行下で、保育者はどのように子どもや家庭への支援を行ったか

一緒に伝えてみてもいいと思います。」

4 日目

保護者「検温の件、コメント頂きありがとうございます。子どもによってかなり体温も差があるんですね…検診で相談してみます。嘔吐は火曜日に1度したきりで、その後はありません。3回食に慣れていないと思うので、ゆっくり進めようと思います。」

保育士「嘔吐がないようで良かったです。3回食が始まって身体が慣れていなかったからかもしれませんね。楽しんで食事が出来ることが一番だと思うので、ゆっくり進めて頂けたらと思います。」

5 日目

保護者「昨日、2回目のご飯を食べさせた時も嘔吐しました。前日も今回も卵白を食べた時に嘔吐したため病院に行きました。湿疹が出ていないためアレルギー検査は今後検討ということでしたが、アレルギーの可能性も考えて気を付けてみていきたいと思います。」

保育士「何度も症状があると不安になりますよね。お電話でも伝えた通り、焦らずゆっくり見守って行ってあげてくださいね。」

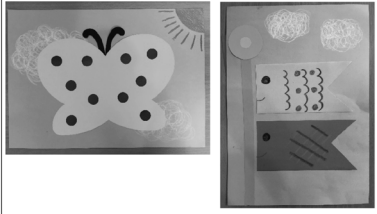
5日目の連絡が来た時点で、保護者の不安が大きくなっているのを感じ、保育士が電話をした。電話で話を聞くことで、少し安心した様子で、この後は食事の件での連絡が来ることがなくなった。他の内容での連絡は頻繁にあったので、食事に関しては、少し落ち着いて行うことが出来るようになっていたのを感じることが出来た。

3) 家庭への紙媒体による資料の郵送

休園になってしまった5月と登園自粛要請が出ていた6月に郵送物での情報提供も行った。園だより・保健だより・献立・給食だよりに加えて、保育園に来られない中で、家庭でも保育園の様子を楽しんでもらえるものはないかと保育士が話し合い、工作用品・手紙・遊べるおもちゃ等を同封した。実物を手にすると、保育園に通えないけれど、先生たちと保育園を感じる事が出来てうれしかったですという報告もあった。

製作の手順書	
下記の内容を参考に是非お子様と製作をお楽しみください。	
今回作るもの	・4月製作：ちょうちょ ・こどもの日製作：こいのぼり
【今回送付したもの】 製作キットの内容	・台紙2枚 ・色画用紙（ちょうちょ、触角、こいのぼり） ・丸シール10枚
【ご用意いただくもの】 必要な道具・物	・クレヨン
作り方	<p>☆ポイント</p> <ul style="list-style-type: none"> ・両面テープを剥がす際は、保護者の方が端だけ剥がし折り曲げておくとお子様が目がしやすくなります。 ・丸シールを剥がす際や難しい際は、手を添えて一緒に行ってください♪ <p>○ちょうちょ○ （手順は交差しても構いません）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ちょうちょの型紙に丸シールを貼り、模様を作ります。 ・ちょうちょの型紙の裏面の両面テープを剥がし、太陽が描かれている台紙に貼り付けます。（台紙は横にして使用します。） ・クレヨンで台紙にお花や雲など自由に描いたら完成です。 <p>○こいのぼり○ （手順は交差しても構いません）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・こいのぼりの型紙にクレヨンで顔や模様を描きます。 ・こいのぼりの型紙2枚の裏面の両面テープを剥がし、ボール（黄色いテープ）が貼ってある台紙に貼り付けます。その際、こいのぼりの顔の部分がボール側にくるように貼り付けてください。 ・クレヨンで台紙にお花や雲など自由に描いたら完成です
	あい・あい保育園

完成イメージ
(あくまでも例です)



【製作にあたっての注意点とポイント】

- ・ハサミやカッター、鉛筆など怪我の恐れのあるものを使用する場合には、必ず保護者の方が付き添っていただくをお願いします。
- ・製作の手順や完成イメージはあくまでも一例ですので、あまりとらわれ過ぎず、お子様の発想や思いを尊重しながら、可能な限りお子様自身の手で作品を仕上げていくことで、お子様なりの創造力やイメージが広がっていき、また手先を使うことで脳への良質な刺激になるものと考えています。
- ・製作中や完成した際には、是非お子様の取り組みを認めてあげてください。
「半分に折れるんだね」「のりが塗れるんだね」「貼れたね」「目が出来たね」「かわいい○○が出来たね」など、お子様の具体的な動作やその結果を言葉にするだけでも十分です。
- ・完成した作品は是非ご自宅に飾っていただけるとお子様の今後の創作意欲や自己肯定感など非認知能力の向上に繋がると考えています。
- ・5月の製作は、緊急事態宣言解除後保育が再開しましたら行えるよう別途準備しておりますので、楽しみにしててください。

あい・あい保育園

図 家庭に送付した教材の例

総合考察

1. 危機の中で生まれる発展

あい・あい保育園の実践を読んで、企業経営による保育事業系列の保育所がICTを駆使して、現代的な手法で家庭との連携を行っていることに驚いた。一方で、公立の保育施設は保育に効率的なデジタル機材を持ち込むことにはこれまで慎重であった。まず、安易にスマートフォンを用いた保育の記録や情報発信を行うことには、情報漏洩や、切り取られた情報拡散の危険が伴う。したがって、多様な事情の家庭の子どもたちを預かる公立の保育施設では、インターネットに容易に接続可能な機器の使用には慎重にならざるを得ない。また、日々の保育の中で、体験活動や、人との直接の触れ合いを重視した保育を展開して、環境設定や課題設定を行っている状況の中では、ICTを使った保護者への情報発信や、デジタル機器を媒介としたコミュニケーションに着手することは喫緊の課題として浮上しにくい。

ところが、今回のような、子どもが登園できない中での保育を模索しなければならないという事態を受けて、「情報漏洩」のリスクを盾にICTの導入に踏み切れなかった多くの教育・保育機関が、本格的にそのハードルを越える取り組みを行わざるを得なくなったのである。区から、幼稚園にスマー

トフォンを配布し、積極的なインターネット配信を要請したことは画期的な出来事である。

ICTが導入されても、体験や直接的な人とのふれあいが幼児期の子どもの育ちにとって不可欠であることは変わらないが、今後、保護者とのコミュニケーションや、園のさまざまなシステムの合理的な運用にICTの活用が一気に進むことが期待される。

2. 在宅保育が増えたことによる効果

休園期間中、どちらの事例においても子育て支援を念頭に置いて、特にリスクの高い家庭への支援は丁寧に行われていた。おそらく、通常の保育を行っている時にはここまでできないだろうと思うようなことが可能になった側面もある。

実践事例2における、保護者への継続的支援は一見すると当たり前のやり取りのようだが、今回の事態ならではの出来事である。まず、普段保育所に子どもを預けている保護者が、ここまで毎日長時間子どもに向き合い、自ら子どもの世話もしつけも行うということはなかったはずである。保護者が試行錯誤して子どもと向き合って、そこに保育者が個別の相談支援を行うという、臨床的な関係が生まれたことは、もしかすると、昼間の時間子どもを預かるという枠組みの中ではできなかったことが成し遂げられているようにも思える。

青木（2020）は、コロナ禍の家庭保育への影響は「二極化」していると述べている。在宅時間の増加や、収入減により保護者のストレスの増えた家庭環境がDVや虐待の起きやすい状況になっている場合がある。一方で、「在宅勤務が多くなり、いろいろと大変だったけれども子どもとゆっくりできた」という家庭もあったのである。緊急事態宣言解除後も、「登園自粛要請」を続けていた保育所等では、登園している子どもたちが、これまでより落ち着いていて、保育の中でも安定していたという報告が多く聞かれる。理由として、少人数でのゆったりした保育を行うことができ、保護者と話す時間も取りやすかったことがあげられている。日本の保育現場における、物的、人的環境に対する子どもの人数の多さは世界に類を見ないが、今回の登園自粛の中で、図らずも生まれたゆとりある環境での保育が子どもたちに安定をもたらしたことは、量を優先して、先送りにしてきた保育環境の質の改善の重要性を実証したことになる。

3. 想像力を駆使した支援の創造

本稿では、東京都内の公立幼稚園と、千葉県内の私立保育所という事業形態の異なる保育施設の実践事例を取り上げた。両者に共通していたのは、感染状況の拡大に伴い発令される行政からの指示や要請を遵守しながら、懸命に子どもと、子育て家庭に対してできることを模索し、工夫し、実践していたことである。

目の前にいない子ども、保護者の状況に合わせた支援を考えるためには、これまでの保育で培われてきた子ども理解、子育て支援の専門性に加えて、家庭で長時間一緒に過ごすことになった親子の様子を念頭に置いた支援の提供が必要になる。

瀧口（2020）は、コロナ禍の下での保育現場についての記事の中で、公立幼稚園会会長の小宮広子氏の話として「『できない』とあきらめてしまうのではなく『何ができるか』を子どもたちに問いかけて、時に保護者の協力を得て『みんなで生きていく』ことを実践していきたい」という言葉を載せている。

本稿で報告した二つの実践記録は、保育者たちが保育の専門家として、子どもたちが登園してこられない時にも、様々な制約の中での保育を強いられるときにも、常に想像力を駆使して、「何ができるか」を問い続けながら、新たな保育を創造していったことを示している。

【引用文献】

青木紀久代 2020 「『コロナ禍』と子育て支援現場のこれから」 『子育て支援と心理臨床』 19,7-10

瀧口俊子 2020 「新型コロナウイルス禍の今臨床心理士として考える」 『子育て支援と心理臨床』 19,11-12

東京大学大学院教育学研究科附属発達保育実践政策学センター 2020a 「『新型コロナウイルス感染症流行に伴う乳幼児の成育環境の変化に関する緊急調査』速報版（結果の要点）vol.1.」

https://www.slideshare.net/CEDEP_UT_Japan/vol1-236082171 2020年9月24日参照

東京大学大学院教育学研究科附属発達保育実践政策学センター 2020b 「『保育・幼児教育施設における新型コロナウイルス感染症に関わる対応や影響に関する調査』報告書 vol.1〈速報版〉概要」 https://www.slideshare.net/CEDEP_UT_Japan/vol1-236630020?qid=f94c672a-ce71-475d-84c4-c17673fed2a9&v=&b=&from_search=1 2020年9月24日参照

